
シャドー ～もう一人の自分～

高木 秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャドー 〜もう一人の自分〜

【Nコード】

N6114G

【作者名】

高木 秋人

【あらすじ】

スポーツ（バスケット）とゲームが好きなごく普通の中学2年生、陽神俊介^{ひがみしゅんすけ}。だが、父親の行方不明事件からその普通の生活が一変した。陽神一族の、ある秘密とは・・・？そして、父の行方不明事件の真相とは・・・？

プロローグ（前書き）

どうも、高木です。僕は、新人なので、面白くないかもしれませんが、読者さん達と「二人三脚」で書いていきたいと思っています。

これから色々、ご迷惑をおかけするかもしれませんが、これからもよろしく願います。

プロローグ

木曜日の午後、五時間目の科目は体育だ。さらに大好きなバスケットきた！僕は、昼休み有頂天になって廊下を歩いていた。

だが人生そんなに良いこと続きじゃない。この日頃は、それを身にしみて知ることになった。

「ブチッ」

うちの学校は相当いかれてて、あちこち壊れている。放送室の機械もその中に入る。だから放送がなる前には必ずと言って良いほど電源をいれる時、音が聞こえる。

今日もその音が鳴った。さあこれで昼休みも終わりだ。そう思っ
て体育館へ歩き出そうとしたその時——

「呼び出しをします。2年B組の陽神俊介さん、ひがみしゆんすけすぐ職員室にきてください。」

「な、なんだあ？」

突然の連絡にとりみだす。が、それより職員室に呼び出されることのほうが驚きだ。

仕方なく、職員室へ歩きだす。

キンコンカンコン

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

「なんの嫌がらせだよー！」

おもわず叫んでしまう。数人の一年生から振り返られる。すっげー恥ずかしい……。大好きなバスケの授業には遅れる、廊下では恥ずかしい思いをする……。最悪だ！さっきまで僕は、思っていた。

だが職員室に入った瞬間、僕はさとった。人生いくらでも悪くなるものだと……。職員室には、母さんがいた。

先生から相談室へ行くように言われた。

相談室が利用される時の理由は二つある。まず、一つめは、問題にこっちがまきこまれた時。そしてもう一つは問題をこっちが起こした時だ。最近、僕が問題にまきこまれとことはない。と、いうことはこっちが問題を起こして呼ばれるということだ。

母さんの顔をうかがうと、やはりしかめっ面をしていた

相談室についたとたんあんのじょう、母さんが怒り始めた。どうやら、僕が酒を飲んでいた（ほんのちょっとね。そこだけはしっかり知ってほしい）のが誰かに見られてらしい。

「なんで生徒がお酒を飲んでいたことを担任の先生が知らないんですか？責任の問題です。ほんとにまったく……。」

なぜか、母さんが先生を怒る。先生をみてるのかおいそうに思えてきた。先生は母さんが文句を言うたびに頭をさげ、すいません、すいません言わなくてはいけない。

そんな光景をみながら僕は今母さんに反発したらどうなるかと考えていた。

「なんだよ！母さんうるさいな！母さんのせいで僕は友達に笑われて大迷惑だ！二度と学校にくるな！」

一人で想像して、にやついてる時にかぎって母さんは一休みしてこっちを見る。

「ちよっと、なにニタニタ笑ってるのよ！」

母さんがまた、わめきだした。それにしてもふつう学校に来てまで説教する？家で怒るんだったらまだ話もわかる。だがここは学校だ。ありえない！正気のことじゃない。

「先生は生徒がなにをしているかおわかりなんでしょうね？先生にはがっかりです。もう　　少し、教育を見直したらどうなんですか？まったく————」

あああ　　もう、うんざりだ！

学校のお説教なんか家での説教にくらべればかわいいもんだ。
僕が家に着いた瞬間から母さんは烈火のごとく、怒り始めた。

「まったく、あのたのせいで私はとんだ恥をかいたわ！どうしてくれるの？一回、自衛隊

へ行って修行してきたらどう？きつと朝の五時に起きて朝ごはんを食べる前腕立て伏せ 五百回と腹筋千回ね。そんな所に一ヶ月居たらあなたのその性格もなおるんじゃない かしらねえ？」

少し頭にきた僕は言ってやった。

「自衛隊？行けるんだったらいってみたいね！でも僕みたいな中二は自衛隊に一時的にで

も入るのはむりなんじゃないかなあ？それとも母さん僕のために長々としためんどくさい書類に僕の年を偽装してまで書いてくれんの？すっごくありがたいなあ！」

だが言ってからしまったと思った。今この状況で得意のブラックジョークをいうのは

かなりマズイ。

予想どおり母さんは顔を真っ赤にして怒鳴り始めた。

「いったいあなた何様のつもりなの？私にまだ恥じ、かかせたいの？」

そして母さんは世界中の母親たちが好んで口にするある言葉を僕に言った。

「お父さんが帰ってきたら、覚悟しなさい！」

結局、僕が父さんを待っていた十一時までには父さんは帰ってこなかった。

母さんの最初のころの怒りはいつのまにか消え、不安にかわっていた。

「お父さんおそいわねえ。どうしたのかしら・・・？」

母さんがあまりにもバカなので一言アドバイスしてやった。

「父さんのケータイに電話すれば？」

そうしたら母さんは顔を赤くして言った。

「うるさいわね！一々、ちょっかいださないで！今しようとした所よ！」

うそだな……。僕は今この瞬間から母さんを絶対、頼らないと密かに決意した。

電話をしている母さんが時折、首を傾げたりしている。いったいどうしたんだ？

いきなり母さんが乱暴に電話を切った。びっくりした僕は聞いた。

「ど、どうしたの？」

「お父さんったらケータイの電源切ってるらしいのよ。まったくいつもあれほどケータイ

はマナーモードにしていっていったのに……………」

「ふん」

「子供はよけいな事に首つつこまないの！もういいからさっさと寝なさい！」

「はい。」

僕はあいまいに答えて自分の部屋へ行った。

そしてベットに潜りこんで数分とたたないうちに、意識が無くなった。

プロローグ（後書き）

どうですか？おもしろかったでしょうか？

ってプロローグが面白いはずが無いですよ（笑）

でも、次回から、ストーリーが急展開して、面白くなるんで、期待してくださいよー！

第1話：悪夢（前書き）

予告通り、今回から面白くします。

まあ・・・論より証拠。見てみてください。
←

第1話：悪夢

暗い。闇が支配する世界……。僕は、当てもなく歩き出した。

時間が分らない。感覚という感覚がない。

今の気持ちは不思議なものだ。……。一応、恐怖とか不安とかが一番あっているかもしれない。

その時だ。目の前に父さんが現れた。

「父さん？早く家に帰ったほうがいいよ。母さんもう、カンカンだもん。」

父さんはなにも答えなかった。

代わりに右腕が伸びてきた。

その手は僕の知っている父さんの手じゃなかった。

色は紫色、爪は伸び放題で魔女みたい、皮膚はごつごつして、数力所からは血が出ている。

悲鳴をあげようとしたが声がかすれて、うまく声が出ない。

父さんが僕の頭をにぎった。人間の握力とは思えない力だ。

「う、うわああああああー——————」

自分の寝言（いや、悲鳴といえはいいか。）で目がさめた。

いつもの机、いつものベット、いつもの部屋……

大丈夫！どれも変わらない。別に何も怖がる事はない！きっと昨日は十一時に寝たんで疲れてたんだ！

俊介は自分で勝手に決めつけて、一階に降りていった。

でも僕はこの時、自分の頭にある、指の形のアザまでは気付かなかった……。。

一階に行ったが父さんは居なかったが母さんが目の下にくまを出して起きていた。

「父さん・・・帰ってきた？」

母さんは首を横にふった。

「そう・・・。。。。。」

母さんが無言で朝食を僕の前に出した。

僕も一言も言わず朝食を口の中にかきこむ。

何もしゃべらず着替えて、歯を磨いて、トイレに行き、顔を洗う。

「じゃ、行ってきまゝす。」

「気をつけて」

母さんが今日、初めてしゃべった。

扉を開けて、外に出て学校へ歩きだす。

歩きながら、父さんがなんで帰ってこないか考えていた。

帰る時事故に巻き込まれたとか？縁起でもない！そんなんだったら、昨日のうちに連絡がきてるだろう。じゃあ、なに？

もしかして・・・。。。。。（言え！勇気を出して！）離婚？
ばかな！そんなはずない！・・・。。。。根拠は、ないけど・・・。。。

必死に自分への言い訳を考えているといきなり、背中を思いきり叩かれた。

びっくりして、振り返ると後ろには勇介ゆうすけがいた。

「よっ！おはよう。」

「お、おはよう。」

「かたいねえ。もっと、明るく！おはよっ！」

「うっせーなあ。おはよ。」

「うっせーとはなんだよ。」

「本当にうるせえんだから、仕方ないだろ。」

「まあまあ、それより俊介、何で今日オレをおいてった訳？」

あ、忘れてた。でも今日はなあ・・・。

「うん、まあ・・・ちよつとな!」

「ちよつとって、なんだよ? ちよつとって!」

「言いたくない。」

「ああ、そうか。わかった。」

勇介って納得早いなあ・・・。ま、そこがいいんだけど。

「あ、そうだ。俊介、お前知ってるか?」

「なにを?」

「今日、A組に転校生が来る事だよ。」

「マジで・・・?」

「マジもマジ也大マジ!」

第1話：悪夢（後書き）

どうですか？面白かったですでしょうか？

次回からがんばります！！（小説は毎日、更新するつもりです）

第2話：影（前書き）

ついにこの小説のタイトルにもなっている。シャドー（影）が登場しました。

第2話：影

ここはB組の教室。

チャイムが鳴る。先生が入って来る。出て行く。そっちはまるで、マンガの一コマのよう。毎日、同じ事の繰り返しだ。

つまんねー。なんか、面白い事ないかなー。

『もういやだ。きゅうくつでしかたない。お前だってこんな未来望んだわけじゃないだろう？——親からの期待、やりたくもない勉強。うんざりだ。本当のオレはこんなじゃない。早くオレを出せ！』

影の自分が僕にささやいてくる。影・・・それは、自分の中のもう一人の闇の自分。なんで僕の中に僕が居るかはわからない。・・・まったくこいつのせいで僕にどれぐらいストレスをかかえてる事か。

『拒否するんだったらそれでもいいぜ。無理矢理、外の世界に出て行くから。』

この一言でついに僕のストレスが最高潮に達した。

「うるさい！」

あ・・・つい大声で喋ってしまった。みんなが僕を見ている。

松浦先生がゆっくり僕の席へきた。

「俊介さん？大丈夫ですか？授業中、大声だして。」

この一言でクラス中が騒ぎ出した。

みんな僕の事を笑ったり、気味悪げに見ている。

「俊介君、大丈夫かしら？」

「俊介バカみてーー。」

「腹いてえーーー。」

俊介は力無く笑って下を向いているしかなかった。そうすると先生がゆっくり口を開いた。

「俊介さん・・・昨日から少し変ですよ？」

「・・・はい。」

「ちょっと、放課後、職員室に来てください。」

少しオーバーだけど死刑を宣告された時の人ってこんな感じなのかな？俊介は思った。だが、二日連続で職員室に呼び出される俊介は諦めの気持ちのほうが強かった。

それにもう、頭の中で怒られた時のためにリハーサルをしていた。

職員室に入ってから二十分。ようやく解放された。

あゝひどい、ひどい。耳いてゝ。僕は耳をおさえながら、歩いていた。

その時、だ。

整った顔、女子が羨みそうな白い肌・・・。僕とは全てが違ってそうな絶世の美少年をA組担当の五十嵐先生が連れている。

正直言ってキモい。筋骨隆々で色黒の体育教師・五十嵐先生と、美肌で色白く、大人しそうなヤツが並んでいる。見覚えのない顔だ。もしかしてあいつが転校生か？

五十嵐先生と転校生（？）とすれ違った。

今だとばかりに全速力で走る。

後ろからの説教を無視してB組に突っ込む。

「おい、勇介！ちょい、来い！」

「あゝ？面倒くせーからおまえが来い。」

チッ。心の中で舌打ちをしながらも勇介の元へ急ぐ。

「勇介・・・オレ、転校生見たっぽい。」

「はい？」

「転校生見たっぽい。」

「マジ？すご！どんな感じの顔？」

「んゝとね。超美肌で、色白で、女子が見たらキャーキャー言いそうなすっぱーカッコイイヤツ。」

「マジかよ。オレそーいうキザなやつ苦手。」

「キザとはまだ決まってるだろ。」

「俊介は分かかってないなあ。そーいうやつは大抵キザなんだよ。」
「ふーん。」

「分かりましたか？ 俊ちゃん。ママ、俊ちゃんがそんな事もしらないってガッカリでちゅよ。」

超甘ったるい声で勇介が言う。

「うるせー。おせっかいだよ。」

「ったく。冷てえなー。お前、妙にそんなところあるよな。やっぱA型ってそうなのか？」

「はいはい、そーなのかもね。分かった、分かった。オメーと話してたら明日になっちゃう。」

ったく。あいつのおちよくりにはもうこりごりだ。

自分の席へ戻ろうとした。その時、足下がふらつく。

そして席に座ると同時に目眩に襲われる。

どうしちゃったんだ。オレ・・・・・・・・

目の前が真っ暗になった。

第2話：影（後書き）

ちなみに「影」の謎はこれからじょじょに分かっていきますから
ご心配なく。

第3話：入院（前書き）

すみません。小説なめてました。

土、日、祝日は、約30%程、更新無理っぽいです。

第3話…入院

目を開けるとそこには闇の中に父さんが一人いた。
「待て。」

逃げようとした僕を父さんが呼び止めた。

静かだが従うざるをえない力強い声だ。

「いったいなんの要だよ？一回、実の息子を殺そうとしたくせに。」
思いつきり皮肉を込めていつてやる。

「悪い。」

謝ったのか？そう思った。

「もう戻れないかもしれない。」

「は？」

「真実を知りたければ、“デステイニー・ゲート”をくぐれ。」

「ちょ、ちょっと待てよ父さん。」

いきなり出てきてなにが“デステイニー・ゲート”だよ。小学生が知ってる単語無理矢理、並べたような怪しい扉、誰がくぐるか。
「お前が絶対、そんな扉くぐらないと思ってるのはわかっている。
だが、お前は必ずくぐることになる。これはなんの脅しでもなくて、運命だ。」

「つつつつ！」

なんでおれがくぐらないと思った事してんだ。みんな、フツ
くぐらないから？そうだ！きつとそうだ！

僕は勝手にそう決めつけた。

「じゃ、待ってるぞ。」

待ってる？じゃあ父さんはまさか……

父さんが暗闇の中に消えていった。

「ちょ、ちょっと待って！まだ聞きたいことが……」
目の前が明るくなった。

「んっっ？ あああ？」

真っ白な壁、たくさんの医療器具。ここは・・・病院？

「よかった・・・よかった俊介・・・あなた丸一日寝てたのよ」

僕の右で母さんが泣きながら話している。

「え・・・・・・・・丸一日？」

「ええ。」

「お母さん、俊介君。ちょっとお話、いいかな？」

先生が口を開いていった。名札を見ると『樋口』と書いている。
綺麗な女の先生だ。

「はい。」

母さんが僕を無視して言う。

「俊介君の脳にはなにも問題はありません。倒れたのは重いショック性の貧血でしょう。」 先生が一気に喋った。

「まあ、様子を見るということで今日一日入院してもらったほうがいいでしょうね。」

「はい。」

今度は僕が言う。樋口先生と会話（こういうのは、会話にはいるのだろうか？）できてうれしい。こういうのを一目惚れというのだろうか？

「それじゃあ私はここで」

先生が出て行く後ろ姿を僕はずっと見ていた。

あゝあ。こんな桜色の花々しい生活も明日が最後かゝ。自分で骨折ってまた入院しよっかな。

「なにニヤニヤ笑ってるの？ 気持ち悪い。早く寝なさい。」

母さんが眉間にしわを寄せながら言った。

いつのまにか笑ってたらしい。僕は笑わないように気をつけながら、ベットに入った。

だが僕はベットに隠しながら笑っていた。

第3話：入院（後書き）

ご迷惑をおかけしてすみません。>（
）<

第4話：暗き病院で（前書き）

今回は、ちょっとグロいかもしれませんが、これを読まないと・・・
（――；）（無言の威圧）

第4話：暗き病院で

夜中、急に目が覚めた。

寝ようとしたが眠れない・・・

時計を見たらちょうど午前2時。

チツ。よりによってちょうど丑三つ時かよ・・・。

『お前がいやなら無理矢理にでも外にでてやる。』

ゾワツツツツ！

背筋に凍るような寒気が走る。

コイツまさか・・・

このまま、ここに居たらいけない気がする。

いや、絶対ここに居たらいけない！

本能が早くこの場を立ち去れといっている。

だれか人のいない場所へ、僕一人になれる場所へ・・・

僕は無意識の内に走り出していた。

角を曲がった。

ドン！

誰かにぶつかった。

ゆっくり頭を上げた。

それは樋口先生ひぐちだった。

こんな時でなければ喜んでいただろう。だが今は違う。下手すれば人命にかかわる。

「ちょ、ちよつと俊介君。今日一日は安静にしてなきゃ。早くベツトに戻って寝なさい。」『お？お前が一目惚れした先生じゃないかよ。コイツはうまそうだな。』

影が話しかけて来る。「うまそう」だと？食う気か？だが、こいつならやりかねない。「先生！早く逃げて！僕の行かない場所・・・に！早・・・く・・・」

ドクン・・・ドクン・・・ドクン・・・

脈が速い。だんだん意識がなくなっている。

樋口先生が戸惑ってる。

「俊介君、何で逃げなくちゃいけないの？先生も一緒に行ってあげるから部屋にもどりま　しょ。ね？」

早く・・・お願いだから早くにげてくれ。

「か、影・・・早・・・早・・・」

意識が無くなって、僕は暗い闇の中に一人落ちていった・・・

「んっっっ？」

目がさめた。まだ日は昇ってない。

顔を手で覆い隠す。それは朝起きた時のくせだった。

ぬるっ。

ん？ぬるってなに？

自分の手を見してみる。

「ひっっ！」

僕は短い悲鳴をあげた。

真っ赤だった。血、血、血・・・手が血だらけだ。

後ずさりしようと後ろに下がると手が何かにぶつかった。

見てみるとそれは変わり果てた樋口先生だった。

「あ・・・ああ・・・」

言葉にならなかった。いや、言葉に出来なかった。

あまりに急激な変化に頭がついていけない。

『誰かに行ったほうがいいんじゃない？で、僕やってません！って顔してたら犯人に　されないかもよ？』

こんな時に限って影が出てくる。

「うるさい！」

そして僕は声のかぎり絶叫した。今の僕の悲しみは、山よりも高く海よりも深い。体の奥から出てくる思いが声となって、一気に

吹き出した。

僕は息の続く限りさけんで、さけんで、叫びつ続けた。
少なく見積もってもゆうに二分は叫んだだろう。

絶叫の後には沈黙がおとずれた。しんと静まりかえる。音になり閉ざされた空間。僕の声も出ず、外の音もとどかない、無の空間。やがて、病院の人達がさっきの叫び声はなんだと確かめに来る。でも樋口先生の姿を見るやいなや、顔色を変えて、なにかを叫んでいる。

だが、その声も僕には聞こえない。

僕は今、一人孤独な世界にいる。一寸の光もささない、死体と血しかない世界。恐怖と殺戮に満ちた世界――。

今日からここが僕の世界だ。

第4話：暗き病院で（後書き）

ちょっと苦手な人は、今回はきつかったと思いますが、これを読まないで、これから、意味分かんなくなると思うんで。

がんばって読んだみなさん！あなたは、よくがんばりました！！おめでとう！！！！

パチパチパチパチ~~~~~

！！号外！！　今度は自分が、暗き病院に行きそうです

ゴホッゴホゴホッ・・・。

あゝども、高木です。『かぜ』こじらせました。熱が出て、今、必死に書いています。

いったん、小説の連載、休むかもしれません。

迷惑かけて、すいません。

かなり、つらいんで後は本編の主人公、陽神　俊介君に司会をまかせます。

さうて、もう一眠りしたら、病院にでもいくか・・・・・・・・

あ、俊介です。高木先生『かぜ』ひいたみたいです。

今の時期にかぜって、かなり珍しくないですか？

やっぱあの人、典型的なB型だな。

あっそうだ。あの人に初めてメッセージ届いたみたいです。よかったですね。

〈裏話〉..「うわっ、マジでメッセージ届いちゃったよ。どーすんのよコレ！！うーん、メッセージ書けて書きすぎたからかな。」
ホントどーしよ？神様、助けて！！」

「自分が都合が悪い時にだけ神様に祈っても叶えてもらえるはずがない。」（一人ツツコミ）

その後、無事に返信することが出来ました。

他にも言う事ないので、僕のプロフィールでも書いときます。

第5話：運命（前書き）

高木です。風邪でした。ものすごく、粘りおった風邪でした。そして、寝ながら思いました。

「健康第一だなく」と
おやじみたいで、すんません。

第5話：運命

あれから二日後。

樋口先生は重傷だが、命に別状はないと新しいよぼよぼのおじさん主治医が言っていた。 だけど問題は・・・

僕はテレビを見た。

『T県のF市にお住まいの陽神栄介氏ひがみ えいすけが仕事に出て行ったきり行方不明となりました。

警察側は会社でのトラブルが無かったかしらべております。もう一度繰り返しします。T県のF市にお住まいの・・・・・・』

「はあああー・・・。」

ため息をつきながら、リモコンでテレビの電源を消した。

僕は横のベットを見た。ベットには母さんが寝ている。

だけど本当の問題は母さんだ。

僕の学校での問題や、重い貧血による転倒、父さんの行方不明・・・この数日、母さんは口に出していなかったただけで自分一人では耐えきれない程の苦しみがあったのだろう。

そしてついに、樋口先生の原因不明の重傷でそれが爆発した・・・そう思うと責任を感じてしまう。

今日は二十四日。あの日から二日目、約束の日。

二日前・・・・・・・・

僕は樋口先生の怪我（僕自身が負わせた怪我）のショックからまだ立ち直ってなかった。

さらに、父さんも母さんも家に居ない僕はどこに居ればいいかわからず、仕方なく病院に入り浸る毎日だった。

そんな僕の運命を変えたのは僕にかかってきた一本の電話だった。

「ツイッター・・・」

たっく、あのおじさん一方的に喋ったら、ソッコーで切りやがった。

ただ、苛立ちと期待が心の中で交差している分、なにも言えない。

まず僕は自分の荷物を整理しようと、イスから立った。

第6話：おじさん（前書き）

・
・

すみません。また風邪ひきました。もう直りましたけど。

あと、『Kmは、機種依存文字です。』ってのが意味分かんなくて・・・（5／10にキロメートルの事かー！！って発見しました。だから文章中はカタカナで書いています）

第6話：おじさん

と、いうわけで僕は今おじさんの車の^{オープンカー}の中にいる。おじさんとの楽しい会話、気持ちの良いそよ風、流れる景色……。だったらどんなに良かっただろう。現実と僕の理想は180度違う。

おじさんは無口。スピードは150キロメートル。気持ちの良いそよ風というよりは、肌に刺さるような激しい風。風が痛いため開けない目。（ようするに景色すら見れない）そして極めつけは、さっきから聞こえる白バイのサイレン。

「スピード違反です。その乗用車、止まりなさい。もう一度言います。その乗用車止まりなさい……」

「ちよっとおじさん。スピード違反だって。」

「うむ……。お前にも言っておいたほうが良さそうだな。制限速度とは、破るためにあるんだぞ！」

おじさんが前を見たまま、答える。

「ちよ、ちよい待って。逃げたら罪重くなるんじゃない？」

「うむ。その通りだな。」

「『うむ。その通りだな。』じゃねーよ！だから何で逃げてんだよ！」

興奮のせいで、だんだん敬語が使えなくなった。

「いや……。なんでって……。逃げきったら、そもそも捕まらないから罪も何もかんけーないだろう？」

あっ、そうか！そんな手が……ねーよ！

「でも捕まなくても、車のナンバー覚えられるんじゃない……」

「大丈夫だ。こういう時のために車のナンバーを偽装している。」

ぎゃあああああああああ！！！！！！！！！！

「……。あの……」

このおじさん頭、大丈夫だろうか？

つーかこんな人を信じていいのだろうか？

僕はなんと言っているのか、分からなくなってしまった。

「しつこいな・・・最近の警察は優秀だな。俊介！！ちょっと、スピード上げるから、しっかり捕まっとけよ！！」

「ハッ、ハイ！！」

車は盛大にエンジン音を轟かせ、白バイを後におじさんの家へ向かって走った。

第7話：真実（前書き）

少しと書きながら、かなり遅れました、、スイマセン
ですが、この場を借りて書いておきましょう！

僕は学生です。学生の本業は、勉強です！！！！さらに、僕は部活
まであるのです。

さらにさらに勉強は2日後に中間テストが！！！！！！

しかも僕は苦手な英語しかやってない！残りの4教科は？
やってない！！！！！！

ちゅどーん、ちゅどーん

第7話：真実

山に入ってだんだん道が荒れてきた。でこぼこ道が車酔いの胃を激しく揺さぶる。

「お、おいしゃん・・・あとよとれきゆらい？・・・」

「ん、あともう少しだが・・・遅いのか？なら、もう少しスピードを上げるが」

それだけはやめてくれ！！！！

だが、言う前に車はスピードをさらに上げて、僕は胃から、せり上がってくる物体と戦うはめになった。

ブロロロオオオオオオオ。

車がやっと止まった。そして、地獄から解放された。

「うっっ！オエエエエエエエエ」

気を許した瞬間、口の中からすっぱい物が出た。

「なんだ。これくらいでゲロってるのか？だらしないぞ。」

・・・おじさん。いったい誰のせいでこうなったか分かってるの？

せめて、ルールくらい守ろうよ・・・

「まあここにいても何だ。家に入ろうじゃないか。」

おじさんに押され、しぶしぶ歩く。

そんな中、おじさんがギリギリ聞き取れるくらいの小さい声で言った。

「お前の父さんの話は今ここではできん。中に入れ。」

「！！！！」

僕は、ゆっくりうなずきドアを押した。

ボタン！

ドアが閉まった。そして、僕はおじさんの顔をうかがい出方を見る。

おじさんがリビングと思われる場所へ歩いていった。

自分にはコーヒー、僕にはコーラをコップに入れ、テーブルに置いた。

「さて・・・どこから話そうか・・・」

僕を見ている。どうやら、質問したいことがあったら自分で言えるということらしい。

「あ、あのさ・・・父さんって今どこに居るの？」

ぼくは、一番聞きたくて、知りたい事をストレートに伝えた。

そして、おじさんは重々しそうに口を開いた。

その言葉は僕の頭を突き抜け渦巻いた。

「お前の父さんは、もうこの世には居ない・・・・・・・・」

第7話：真実（後書き）

言い訳、書いてたら武勇伝かなくなりましたね・・・
なに／＼そんなモン書かなくていい？
わかりましたよ、わかりましたよ（；
|；
）

第8話..コーキュートス(前書き)

さあ、武勇伝♪といく前にお知らせがあります。

「貧血」になりました☆

アハハ。もう笑うしか、残された道は無いよ。

第8話..コーキュートス

「え.....?」

父さんがもう、この世にいない?じゃあ死んだ?

僕の中で様々な考えが浮かび上がってくる。

その時、予想もしてなかった言葉が飛び出した。

「誤解するなよ。『この世にいない』っていうのは、死んじやいまして。さようならっていう意味じゃないぞ。」

ハイ?

「じゃあどういう意味なんだよ。死んでないのに他界したってどういうこと? 文章的に考　えておかしいじゃねえか。」

「俊介.....」

おじさんがこの先の事を言うのを、ためらっている。

あの、いつも言いたい事はなにも考えず、ストレートに話してくるおじさんが。

そして、決意を決めたようにおじさんの口が開いた。

「神は始めに二つの反発しあう物を創った。光と闇。空と大地だ。」

おじさんはまるで、物語を読み上げているかのように言った。

「光、空、大地はほぼ、この世の所有物だ。だが、この世には完全な闇は存在しない。あって50%程だ。」

じゃあ50%だけで、殺人事件が多発してるわけか。すごいな。

「だが、一つだけ完全な闇が存在する場所がある。この世が光だとすれば、闇に当たる場所——『コーキュートス』だ。」

こーきゅーとす?なんだそれはいったい。

「コーキュートスは元々、地獄の最下層として最大の罪である『裏切り』をした死者と魔帝サタンが封印されているとされている。だが所詮、物語は、物語だ。」

といっても7割は、核心をついている。」

サタン!あの、ゲームとかマンガで出てくる、あのサタンか!

マジで居るんだ・・・

ヤベー。狂ってるじゃん。

「コーキュートスには、たしかに罪人とサタンがいる。だが、実際は、サタンが罪人達を 魔族に転生させている『魔族・製造工場』にすぎん。」

きたー！爆・弾・発・言！！！！！！！

「いやー、おもしろい設定だね。なに？ 「魔族・製造工場」？おじさん、冗談真顔で言う のやめようよ。オレ、マジで一瞬信じちゃったじゃん。」

おじさんがオレの顔を見つめている。いや、にらんでる。

「俊介・・・私は冗談や隠し事はあまり言わんタイプだぞ。」

え・・・じゃあ・・・マジ？

第8話..コーキュートス(後書き)

高木.. また、武勇伝が書けなくなりましたな。

ひじょーに残念です。

俊介.. お前そう言いながら、武勇伝が無くて困ってんだろ？

高木.. なんで、お前がでてくんだ！ちゃんと武勇伝の一つや二つぐらいあるわ！

俊介.. ふゝん・・・(疑いの目線) まあ、いいや。

話は変わるが、次回はオレの父さん、陽神一族の秘密がついに、明かされる予定だ！
楽しみにしておいてくれよ！！！！

高木.. ああああ。コイツ、オレのセリフ全部、持っていきやがって。

俊介.. 細かい事は気にしない！B型だろ？

高木.. サラッと個人情報ばらすなあああ！！！！

俊介.. いーの。いーの。じゃあいくぜ。スリー！ツー！！
ワーン！！！！

高木&俊介.. ハッ次ス回ル！も、ハッおスタル！のしみに！！！！

(→カタカナが高木、それ以外が俊介)

俊介.. なに言ってるか、わかんないわあああ！

そもそも、高木の「ハッスル！ハッスル！」って古いだろ！

高木.. しょうがないだろ。あのノリだもん！！

俊介.. 読者さんに分かりやすく説明すると、オレが「次回もお楽しみに！！！！」って言ってる、

高木のバカが、「ハッスル!ハッスル!」と
言ってたわけだ。

高木..
そろそろ、疲れてきたし、長くなってきたから
やめるか。

俊介..
そうだな。今度こそまちがえるなよ。いくぞ!
スリー!ツー!!!ワーン!!!!!!

高木&俊介..
次回もお楽しみに~~~~!!!!!!

第9話：魔帝皇

「地獄まで行く程の罪人というものは心の中の闇が強くてな。魔族には、転生しやすい。」

ああ・・・うん・・・そうなんだ・・・

でも、まだ疑問はある。

「そこまでは分かった。でさあ、魔族ってのはどんなのが、いるの？」

「うん。お前もRPGなんかをやってて少しは分かると思うが、主なものは、「悪魔」、「魔龍」、「堕天使」、「精霊」、「亜人」、「魔人」、「妖怪」、「魔獣」、「皇魔」・・・名をあげれば、きりが無いが大体はこれらだ。」

おおお！オレのお気に入りキャラばっかじゃん。かけー。

「だが、この上に各種族のトップ『魔将』がいて、さらにこの上に魔将の中でも特に力が

強い『天魔將軍』と呼ばれる奴が7人いる。

そして、1000年に一度変わり、全魔族の頂点に君臨するのが『魔帝皇』だ。」

か、かっこよすぎる！！！！

「コーキュートスっていう所があって、その中に魔族に変えられた罪人とサタンがいるのは分かったけど、父さんは？父さんはどこにいるの？」

少し気づいてた。でも否定してほしかった。嘘でもいいから、言っただけじゃなかった。「お前の父さんは・・・栄介は・・・」

おじさんが奥歯をかみしめる音が聞こえた。

やめてくれ！頼むから言わないで・・・

「コーキュートスにいる・・・」

「なんでなんだよッッッ！！！！」

「……………なんだよ……………」

胸が苦しい。呼吸が乱れる。

そんなはずがない。そんなはずが・・・

「サタンが魔帝皇になってからもうすぐ1000年になる。お前の父さんはサタンに選ばれ、魔帝皇候補として、コーキュートスに行った。」

なんで、そんな冷静でいれんだよ!! ありえない! 自分の息子が魔帝皇になるかもしれないのに・・・コーキュートスに、魔界に行ったのに・・・

なんで・・・

第9話：魔帝皇（後書き）

高木.. もう、ぶっちゃけ武勇伝とか、めんどくさくねえ？

俊介.. やっぱりお前、武勇伝無いのか.....

高木.. うるせーやい！

あ、もう時間ないので次回予告をします。

次回こそ、陽神家の謎について書きたいと思います。お楽

しみに！！！！

ではっ！

俊介.. コイツ、逃げやがった.....！！！！

第10話：神と悪魔

頭がクラクラする。そんなはずが、無いのに・・・

「ゴホッゴホッ！」

呼吸が乱れる。胸が苦しい。

風邪ひいちゃったかな？

その時、確かにふらついた。

まさか、また・・・

「ドサッ！」

その音が自分が倒れた音だと理解するには、時間がかかった。

「俊介！！大丈夫か！！！」

「……………」もしかしたら……………」

遠くでおじさんの声がする。

そして・・・目の前が真っ暗になった。

「ん、んんん」

目を開けた。どうやら、ベットに寝かされてるらしい。

隣には、うつむいたおじさんがいた。

ベットから起きあがった。

「ありがと。」

「ん？ ああ。」

「……………」

「……………」

「ねえ、おじさんが言いかけた『もしかして』って続き、なに言いたかったの？」

ふううう……………おじさんが深く、息をはいた。

「もう、隠しとうせるものではないな……………」

そして、おじさんが語り出した。
真実を。

「普通の人間は心の闇が2、3割。光が7、8割だ。それに対し、陽神家の人間は覚醒後 闇が10、光が10になる。」

「ちよっと、タイム。覚醒後ってどういう事？」

「うむ。陽神家の人間は、ちようどお前くらいの年になると、『覚醒』と呼ばれる事が起 きて心の光と闇が強くなる。」

「それは、分かった。でも、心の光と闇が強くなるとなにが起きるの？別に変わんないん じゃない？」

「全然違う。覚醒後には良いこともあるが、悪い事も起きる。まあ、ただそれだけだが・・・」

だが俊介、これだけは覚えておけ。人は心の中に神も悪魔も飼っている。そして、陽神 家の人間の神と悪魔は、どちらも最強のものだ。」

おじさんは、最後の二文を強調し、少し意味ありげに言った。

・
・
・
・

だが、おじさんは言っていた。神も悪魔も、と・・・・・・

第10話：神と悪魔（後書き）

高木.. いや、なんか俊介君もけっこー悩みのもの
あるんだね。

俊介.. そーなんだよ。最近、目眩とかが多くて困る。

高木.. まあ、僕も貧血になって、共感できる所はある
だけだね。

俊介.. フツ・・・きさまは「貧血」という悲しい病名
だが、僕は「覚醒」というカッコイイ響きがあ
るからね・・・

高木.. あー！！！！お前が覚醒したなんて、まだ本文で
書いてないのにー！！！！！！

俊介.. あっ・・・

まあ、過ぎたことは、気にせずに前へ進もう
じゃないか！！！！

高木.. う~~~~~~~~・・・・・・

俊介.. ちなみに次回は、本文でオレが覚醒したって事
と、オレの父さんが、なぜコーキュートスに
行ったかを書くつもりらしいぞ。

じゃあ、楽しみに待っててくれ！！！！

高木.. 待て！オレはオマエに言いたい事が沢山・・・

・

第11話：血縁

おじさんの話はさらに続く。

「お前が最近、目眩とかが多くなったのは、たぶん『覚醒』によるものだと思うぞ。」

え、マジ！？

なんか分からんがキター！！

「喜ぶのはいいんだがな、俊介……。覚醒というのは、陽神家の血の中にある『悪魔の意志』を継ぐ事になるんだぞ。」

ドギューン！

その言葉が僕の脳天を貫いた。

「さつき、言っただろう？『陽神家の人間の神と悪魔は、どちらも最強のもの』だと。」

陽神家の血には、神の落とし子「人間」の血と、魔帝皇の落とし子「悪魔」の血が半分ずつ入っている。つまり、陽神家の人間は人間と悪魔のハーフだ。」

ズギューン！！

だめだ。もう、話についていけない。

「これは、お前の父さんがコーキュートスに行ったこととも、関係がある。」

え……

「陽神家の悪魔の血は最高クラスの物だ。これをなんとか利用できないか、とサタンは考えた。そして、出した結論がお前の父さんだ。」

「

ズドーン！！！！

もう、頭がパンクしました。

「今、お前の父さんは魔帝皇最有力候補だと思う。俊介、父さんを助けたいか？」

「当たり前じゃん。助けたいに決まってる！」

「おーし。なかなかいい目だ。助ける方法は一つだ！それでもいいか？」

「うん。それでいいよ！」

「よし、俊介。お前はコーキュートスに行け。武器もちゃんと持たせるから、大丈夫だ！」

はい、ストーップ！！！！

「は、なに言ってるの？ かわいい孫にそんな危ない事させていいのか！！」

「ああ、いい。オレはお前もお前の父さんも無事帰ってくると信じてるからな！！！！」

「んな、無責任に信じるなあああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

思えば、この日が僕の運命の分かれ道だったのかもしれない。

第11話：血縁（後書き）

高木.. 面倒くさいんで、次回予告だけにしときます。

俊介君、もしかしたらもうお別れかもしれません。俊介君
!!今までありがとう!!!!

第12話：妖刀 封魔の刀（前書き）

―前話のあらすじ―

話の流れでコーキユートスに行くことになった俊介。
はたして叔父から譲り受ける、妖刀 封魔の刀とは！？
ふうまのとう

第12話：妖刀 封魔の刀

「いや、俊介。行ってくれるか！助かる、助かる！」

「ちよつと待って。それって、詐欺じゃねえか！」

「詐欺とは人聞きの悪い。ちゃんと、武器も持たせると言ってるではないか！」

「んな武器、悪魔と戦う時なんの役にもたたねえよ！1合交えるだけで、刃こぼれが出わー！」

そこで、おじさんが不敵に笑った。

ぜってー、なにか言い返す気だ。

「フッフッフ。そう言うと思っていたぞ。自ら罠に飛び込むとは、なかなか良い度胸だ。ちよつと、持ってる。今いい物を持ってきてやる。」

なんだよ。「いい物」って。「いい物」って！

なんか、嫌な予感がするんだけど・・・

そんなことを考えている内におじさんが帰ってきた。

「ついに貴様にも見せる日が来たか・・・

見よ！！！！これが、陽神家の伝家の宝刀にして、妖刀村正、最終最高作品『封魔の刀』だ！！！！！！！！」

な～にが、妖刀、伝家の宝刀だ。ただのボロい刀じゃねえか。

バカが・・・・・・

「ふっ、バカにしとるな？バカにしとるよな！？

聞いておどろけ！！！！なんとこの刀には最強の魔族が数体、封印されているのだ！！！！

どーだ！すごいだろう。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なに言っとるんだ。この、クソじじいは。

ついに、ボケてきたか・・・・・・

「あのー．．．．．おじさん。頭、大丈夫？ラリッてない？
変なもん、食ったとか。」

「なにを無礼な！！ちゃんと現役バリバリじゃ、ボケ！！
ついさっきにも言ったが、（第8話参照）わしは冗談や隠し事は
あまりしないタイプだぞ。」

じゃあ、やっぱりマジか．．．．．
頭がついていかねえええ。

第12話：妖刀 封魔の刀（後書き）

高木… いや、俊介君、たいへんな事になりましたな。ガンバ！
！応援してるよ♪（＾―＾）／～（他人事）

さて、次回予告といきますか。次回は妖刀 「封魔の刀」
について、詳しく書きたいと思います。お楽しみに！

ちなみに、この封魔の刀は嬉しい事にファンである「1年
B組3番」さんからの案です。

ありがとうございます！！！！！！

第13話：妖刀の叫び

「あ、そだ。コーキュートスにはいつ行く？」
「ばれたか!!」

「え．．．？うゝん。そだなく。いつ行こっかな？どうしようかな．．．．．」

きつと、こうやって言葉をにぎり続けてたら、おじさんでもいつかは、根気負けするはずだっつ！！！

「あつ、そうだ。これからの事にあたって良いことを教えてやる！俊介、思い立ったが吉日だったら、思い立った日以外は、全て凶日だ！！！どうだ、役にたつだろう？」

ハハハ．．．．．つまり、今日行けてことですか．．．．．

「あつ、で、でもさ．．．コーキュートスには、いけないんじゃない．．．」

言い終わる前におじさんが答えた。

「大丈夫！！！わしは、その道のプロだ。魔法のことだったら、なんでもワシに聞け！！」

ハハ．．．期待はずれの答え．．．もう少し空気読もうぜ、おじさん．．．

「はいっ。何もないようなので決定！！！武器は、いろいろあるがやっぱり陽神家は、封魔の刀だろう。相性とか、力量的に。」

俊介、この刀を抜いてみる。」

「ん？ああああ．．．．．」

そして、刀を抜いた。

だが、奇妙な事が起きた。

刀が赤黒く光り、中から断末魔の叫びと言えいいのか．．．

とにかくそんな響きが聞こえた。

「むっっっ！！！！俊介、早く刀をしまえ！！！！！！」

「え……？」

「早く！！！！！！」

なんか、よく分からねーけどヤバいみたいだな。

「アアアアアアアアアアギアアアアアアアアア————」
この変な響きにビビりながら、刀をしまった。

「ふゝむ……まずいな………」

え、なんかヤバいの！？

第13話：妖刀の叫び（後書き）

高木… なんか、次回予告のところで進めませんでしたね。もう、面倒くさいんで、次回予告して終わります。

次回こそは、封魔の刀について詳しく書きたいです。いや、書きます！！でわっっっ！！！！

第14話：光と闇（前書き）

◎陽神 俊介

年齢：14歳（中学2年生）

成績：体育だけ、オール5

闇と光を10…10ずつ持つ、陽神家の少年。父親が「魔帝皇」候補として、コーキュートスに行ったため、今決断をしねばならない。どうやら、「魔封の刀」には相性が悪いらしい。

ちなみに、ある昔の予言書には、『伝家の宝刀、赤黒く光りなせば、その者、破滅と希望、招く者なり。』と書かれている。どうやら、俊介に関係があるらしい。

誕生日は皆既日食だった。また、陽神家の人間は全て、太陽と月に関係のある日に生まれた。

第14話：光と闇

「ちょっと、おじさん。なんかヤバいの？」

そして、おじさんが唸った。

「うゝゝゝむ・・・はつきり言うと、かなりマズイ。」

あーやっぱり、マズイのか・・・

でも、どこが？

「俊介、お前の考えている事は大体分かる。『いったいどこがマズイのだろう？』だろ？」

それを知るためには、やはりこの世の理という物を知る必要があるな。」

ギクッ！

なぜ、それを・・・まさか、魔法か！？

「言っとくが、魔法は使つとらんぞ。なんでも、魔法だと思うのは良くないな。」

じゃあ、なぜ！？

「オマエがこれを聞いたら、絶対思うと予測したからだ。簡単な、心理学だぞ？」

まあ、それはいいとして、本当に覚悟はできているのか？」

「・・・・・」

なにも言えなかった。いや、言わなかった。

言ったら・・・言ってしまったら、もうこの世界にはいれないと思っただからだ。

なんて、情けねーんだ。カッコワリー・・・

そんな、僕の気持ちを知ってか、知らずか話を続けた。

マジ本気な顔で。

「この世にはコインの裏、表のように光と闇が存在する。光を持つて、闇を滅する事も可能だし、逆に闇を持って、光を滅ぼすこともできる。」

・・・だが、特別な、異質な物が、極稀に強大な光を持って光を、凶大な闇を持って闇を滅ぼす事が可能になる。これが、俗に言われる『魔剣』、『聖剣』なんかだ。

話がそれるが、コーキュートスは扉を開く魔術師の力量も関係はあるが、扉は、真実を知りたい者の意志に反応する。

・・・・・・もう一度聞く。俊介、お前にコーキュートスに行く覚悟はできているか？」

第15話：決意と黒い剣（前書き）

★陽神 栄介

年齢：41歳（会社員）

成績：会社の成績は普通のサラリーマン

魔帝皇最大候補の俊介の実の父親。今年が前厄なためコーキユートスに行ったのではないかと叔父は考える。

と、すると来年が本当の厄年、本厄なため来年はこれ以上の災厄が訪れるのではないかと叔父は思っている。

データはほとんど残っていない。

第15話：決意と黒い剣

父さんが魔界に行っちゃった？

魔帝皇候補？

おじさんが、魔術師？

オレも魔界に行かなきゃいけない？

ゲームの中だけだと思ってた。

ハハ……冗談だろ？

「俊介、お前にコーキュートスに行く覚悟はできているか？」

その言葉が妙に、心に突き刺さった。

なんでか分からない。

でも、答えは自分のハート《心》が言っている。

答えは————イエスだ。

「分かった。……オレはコーキュートスに行く……！」

「……本当にいいんだな？」

「……ああ」

「ふむ。まさかこう、あっさり決まるとはな……まあ、それはいい。問題は持っていく武器だな……さて、どうするか……」

やっぱり、封魔の刀は持っていけない、なにかがあるのか。

「ん？そう言えば……。まさかな……」

なんだ？何を言いかけた？

「だが、もしかしたら……。俊介！ちょっと待ってれ……！」

なんだ、なんだ。いったいどうした！？

ドダダダ！

階段を駆け下りる音がした瞬間、おじさんが部屋に入ってきた。

「しゅ、俊介。これを抜いてみる……」

渡されたのは鞘ばかりか刀身も黒い、長さ1m程の長剣だった。それなのに、あり得ないほど軽い剣を僕は抜いた。

ブウウウオオオオオオオン

なにか、虫がすぐ近くを飛んでいるような音だった。
不気味で・・・そして美しい響きだった。

「そうか・・・やはり・・・」
おじさんが、意味ありげに呟いた。

第16話：密談（前書き）

☆陽神 充

年齢：60才

職業：魔術師といっているが本当は魔導師

魔導師であり、エクソシスト。俊介の叔父。

魔導師とは、魔術、呪術、召還術、全てを使いこなす者の名称である。ちなみに魔術師は、魔術の他にもう一つの術が使える者のことを指す。

第16話：密談

コーキュトスにて――――

「報告します、サタン様。陽神俊介が第一期覚醒をした模様です。我が精霊工作部隊は、今もマジック・ビジョンで監視を続けて――

」

「ククククク……」

精霊魔将「パラケルスス」の報告を笑いで遮ったのは他でもない、全魔族を統べる皇、魔帝皇サタンであった。

「ついに、あの予言の者が第一期覚醒をしたか。それでいつ、ここに来させる計画だ？」

フツ、『来させる』、か……

力、戦略眼、畏敬、そして……『特殊能力』。やはりこの方は、王たる者の器の持ち主だ。

「現状では今宵に。」

「フム、そうか。」

その時、部下がノックもせずに入ってきた。ノックをしないところを見ると、新入りだろう。

「ほ、報告します！「予言の者」が例の『封魔の刀』、『ナイトメア・ブリンガー』を所持した模様ですっ！！」

「なにっ!？」

サタン様は平然としていたが、他は完全にヤバイという表情だった。

魔族は、俊介の手にした二つの武器によって以前、ある一人の男と戦い、敗戦しかけたのである。光と闇の衣ころもをまとう男によって。「報告ご苦労。しかし、わしの部屋へ入る時はノックは絶対だと、分かっているよな？」

「はっ、はい！申し訳ございません！しかし、あまりにも急いでいたもので……」

「今更あやまって、許されると思ったかああああ!!!」

そして、サタン様がその者（名前不明）を睨んだ瞬間その者は倒れた。もう息はしていなかった。

サタンの機嫌が最高に悪いのは、みな一目瞭然だった。

「サ、サタン様！能力を使うとお体が・・・！」

「あんな精神力の無い者に使っても、なにも変わらんわ！それより準備を進めろ。」

「ハッ、ハイ！」

こうしてパラケルススは、サタンの言葉に追われる様に部屋を去ったのである。

第17話..カオスの天秤（前書き）

★ナイトメア・ブリンガー

誕生…???

業歴…大量虐殺。

コーキユートスで、一つの王都を一日で、無数の墓標に変えた。その頃から、現世でも悪名が広がり始め『例の剣』、『悪夢を呼ぶ者』と言われ始めた。

その後、現世の屈強の賢者を数人、生け贄捧げ、力の封印に成功した。

第17話..カオスの天秤

パラケルススが部屋を去ってから二時間後――――

「失礼します。」

ノック無しで、愛想のないような顔つきの人間が入ってきた。

それなのに二時間前の、あの者とは違いサタンは笑顔で言った。

「おお。エイスケ、待っていたぞ。」

「恐れ入ります・・・」

栄介はまったく、そう思っていない事をぬけぬけと言った。

「まあ、それはいい。突然ですまんがわしは、お前に新たな、名を授けようと思う。殺す者という意味を込め、名を『マーラ』にしようと思うのだがな・・・」

「光荣でございます。」

「そうか。お前は元陽神家の人間だからな、一応種族は魔人と皇魔のハーフという事にしておくか。」

「私はもう、あの家とは縁を切りました」

栄介はいつもにまして、ムスツとした声で答えた。

「まあ、そう言うな。かの、カオスシリーズで最も重要な『カオス（世界）の天秤』を守る、偉大な一族だろう？ 貴様に能力があるのだから陽神家の者だからだしな」

「まあ、それは・・・」

「ならいいじゃないか。それは、それでお前に初仕事をやりたいのだが。」

「仰せのままに」

「お前に今夜、陽神俊介の抹殺を頼みたい・・・！」

「――！！！」

「やはり嫌か？」

「私はもう魔族ゆえ、魔帝皇様の願いは絶対でございます。」

その言葉には人間としての未練は少しも残っておらず、代わりと

言えは凍り付くような意志が表れていた。

「そうか。ではたのむぞ。」

「ははっ」

こうして、マールは自分の子を抹殺するために部屋を出て行った。

「さて、予言されし者の實力はどれ程か・・・マールの前に少し、新入りの、『奴』を使って試してみるか・・・」

部屋には、サタンの残忍な笑い声だけが響いていた。

第18話：悪夢を呼ぶ者

現世にて――――

「そうか・・・やはり・・・」

おじさんが呟いた。なんだ？なにが『やはり』だ！？

「その剣の銘は『ナイトメア・ブリンガー』という・・・――悪夢を呼ぶ者という意味だ。この剣を一振りすれば後ろに100の墓ができるまで、言われた。さっき話した（第14話参照）魔剣と言われる代物だ。」

怖っっ！ひゃ、100の墓！？たしかにそりゃ、悪夢を呼ぶ者だろうね。

ていうか、そんな怖ええ剣、なんで封印もせずにこんな家に放置してんだよっ！

「ただ、この剣は闇の力を持って闇を征すという考えの下、創られた剣だ。さらにお前は闇――悪魔の血が入っている陽神家の人間！さらにさっきの『ブウウオオオオオオン』という音、魔響まきょうが鳴ったのが何よりの証拠だ。あれは剣が認めた者にしか鳴らん。」

マヂかよっ！？け、剣がオレを選んだ？一振りすれば100の墓ができると言われた剣にオレが！？

「さあ、武器は決まりだ！多少の不安はあるが、一応『封魔の刀』も持たせるから多分、大丈夫だ！！」

なんだよ、『多少の不安』とか、『多分、大丈夫』とか、自信の無い返事は！

「大丈夫だ！心配なんかいらん。過去に陽神家の戦士が、今お前が持っている二つの剣によって魔族の30%を壊滅させた事がある。お前もその血を継いでいる。きつと大丈夫だ！！」

なんか『大丈夫』から、『きつと大丈夫』になってる気がするけど・・・

「よし、俊介！」

「なに？」

「なんか、今、話の内容が変わった気が・・・」

「皆既日食を見に、悪石島にいくぞ！！！」

「・・・」

「なに絶句しているんだ？」

「おじさんの質問に僕は冷静に対処した。」

「落ち着け・・・落ち着け・・・相手はただのバカだ・・・気にするな・・・」

「なんか今、失礼な事、考えなかったか？」

「い、いや別に考えてないよ・・・それより、やっと決意したっていう時に、なにを言っておられるのでしょうか？」

「ちがうわ！わしがただの旅行をしに、悪石島に行くとおもっているのか！？」

「僕は笑顔で答えた。」

「うん♪」

第18話：悪夢を呼ぶ者（後書き）

何気に「皆既日食」とか「悪石島」って空気読んでません？読んでるよね！？（脅迫）

第19話：漆黒の太陽（前書き）

訂正・・・というか書きたし

17話の前書きでのナイトメア・ブリンガーの件について。

「なんで、コーキュートスの事（他人事）なのに現世に人達を犠牲にしてまで、力を封印したんですか？」的な疑問を持ってる方もいると思うので説明します。

え〜とですな。ナイトメア・ブリンガーは、常に強者の下へ、転移する能力といか、意志を持っています。18話に書いた通り、陽神家の人で、そういう人は多いわけです。そして、コーキュートスの二の舞にはなりたくなかった、（コーキュートスと違い、現世でそんなことが起きたらパニックを起こすから）人が、命をも捨てて、力を封印した訳です。

第19話：漆黒の太陽

「言っとくがこれは、『扉』を開くための準備段階なんだぞ。」
「旅行が？」

「そっちなじゃないわ！『皆既日食』というのがポイントなんだ。」

「あ、そっちな・・・」

「空気ぐらい読め！この、KYが！」

「あゝ、ハイハイ分かったツス。で？なんだって？」

「逃げたな・・・まあ、良しとするか。想像力の無い、オマエのために説明してやる。いいか？皆既日食というのは、数分の間、太陽——『光』が、月——『闇』に食われ、『漆黒の太陽』が表れる。つまり、コーキユートスへの、一番抵抗力が無くなって現世にコーキユートスが少し、入り交じっている。」

「・・・」

マヂかよっ！？まさか、皆既日食にそんな秘密があったとは！
「よーするに、コーキユートスには、一番安全に行けるってことだと、いうわけで悪石島にいくぞっ！ジェット機はもう手配してある『封間の刀』、『ナイトメア・ブリンガー』と邪魔にならない程度の荷物をもって、早速出発だっ！！」

「・・・」

なんだよ、このテンションの高さ・・・

「だから、なんで絶句する？」



ここはジェット機の中。いろいろ疑問はあるが、やはり一番は——これ（ジェット機）がなぜ、おじさんの物なのかだ。つか、自家用ジェット？ありえん！と、いうか認めたくない！！

と、その時、おじさんが話しかけてきた。

「いろいろ疑問があるのは、分かっている。だが、今はこの時間を利用して、面白い話をしてやろうじゃないか。」
面白い話・・・？

第19話：漆黒の太陽（後書き）

ハハハハハ！読者のみなさん。僕はブログを作りました。タイト
ルは「高木 秋人 小説日和」！！！！

詳細として、アメーバブログというトコでやっていてブログのU
RLは以下の通り←

<http://ameblo.jp/syouseitubiyori/>

じゃんじゃん、見にきてください！！！！（完全版 シャドーも書く、
予定です。）

第20話：おもしろい話（前書き）

第20話：おもしろい話

おじさんが語り始めた。

「まず、今まで『扉』と言ってた物の呼び名は正式には『真理の扉』と言う。おわり。」

フ、フーン……。って、エエエエエエエエ！？それだけっ！？早ッ！！

「あと、もう一つ。今、言った、『真理の扉』の事について。」

あ、やっぱり、もう一つあるのか。なんか、ホッとした。

「メンドくさいから、名前、『扉』に戻すぞ。」

「え？あ、うん。」

メンドくさい……。なんて理由……

「扉ってのは、最初から元となる……。っていうか、ちっちゃい扉は最初からできてるんだ。まあ、0.1mmくらいだがな。それを広げていって、人間一人、入れるサイズにするのが、次にやる作業だ。」

ふーん……。て、なんかこの非現実的な話に、ついて行っちゃってるよ！オレ！！もうだめだな。人間として……

「だが、0.1mmなんて、病原菌は普通に通れるよな？」

「いや、そりゃあ通れるでしょ。」

「病原菌ってのは、一番弱いが、一応魔族なんだぞ。」

「はい？」

「病原菌は魔族だ！」

おばばばば……。オレ、死んだな☆

ふつ々に風邪になるってことは、それより強い魔族にも、フツに負けるってことだろ！？

「その、心配はいらん。今、お前は魔族の恐れる「ナイトメア・ブリンガー」と「封魔の刀」を持っている。そんじょそこの魔族には負ける心配はしなくていい。」

・
・
・
やっぱ、この剣スゲー物なんだ
・
・
・
・
・

第20話：おもしろい話（後書き）

なんか、題名と比例して、全然面白くない話であったと反省しております。

そーいえば、僕のブログ読んでくれましたか？もし、読んでないとしたら、すぐ、読んでください！

お願いします！！>（――）<

第21話：精霊

・・・やっぱ、この剣スゲー物なんだ・・・

「ああ、いかにもその剣はすごい物だ。」

今のは、ぜってー魔法だ。人の心、読むなんてサイテーだな。

「どうすごい剣なのかは、今から説明するが、一つ訂正をしよう。

今使ったのは、魔法じゃなく、『魔術』だ。」

「え、魔法と魔術って違うの!？」

「魔法は『魔界の法律』のこと、魔術がお前の考える、敵を倒すという『攻撃』とかの類たぐいの物だ。」

へええ。マメ知識・・・

「さて、『ナイトメア・ブリンガー』がいかにすごいか教えてやろう。まず、質問から。俊介、『四大元素』って知ってるか？」

「いや、知らん。」

「即答・・・。お前、無学だな。学校の勉強、大丈夫か？」

「フッ。なにを心配しているのですか？僕の成績はオール5だぞ！」

「おお!! すごいじゃないか！」

「まあ、体育だけだけど・・・」

「・・・は、話を元に戻すか、俊介・・・四大元素というのは、火の精——『サラマンダー』、水の精——『ウィンディーネ』、風の精——『シルフ』、土の精——『ノーム』のことを指す。」

ちよっと眠くなってきたけど、話がおもしろそうだから許す。

「面倒だから、これから略して『四精霊』と言うぞ。ちなみに、この四大元素に光の精——『ゼウス』、闇の精——『カオス』を入れたのが陽神家バージョンってどうか、最近の流行はやりだ。」

ほうっ! 面白くなってきた!

「そして、『ナイトメア・ブリンガー』にまつわる言い伝えにこんながある。」

そして、おじさんが声のトーンを変えて、話し始めた。ゆっくりと。

「『サラマンダーが熱し、ノームが鍛え、ウインディーネが冷やし、シルフが研ぐ。さすれば、大きな力、手に入る。光と闇が、混じりあいその剣入りなせば、混沌、摩訶不思議なる能力で幾人の者、魂吸われるであろう。』」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

僕でも、大体は分かった。だが、分かったから、なにも言えなかった。

周りが静寂に包まれた・・・・・・・・

第22話：皆既日食（前書き）

第22話..皆既日食

キイイイイイイイイン・・・・・・・・

飛行機が那覇空港に着いた。

「さて、次は船で悪石島までいくぞ。」

「うん・・・」

元気の無い返事に、おじさんはなにか言いたそうだったが堪えた。

——魂が吸われるってなんだよ！そんな怖ええ剣、捨てちみたい・・・・・・・・

——☆——★——☆——★——

時と場が変わり、悪石島——

おじさんが気遣ってくれたおかげで、僕もだいぶ楽になった。

そして、ついに皆既日食・・・

太陽がどんどん、月に食われていく・・・・・・・・

「ウオオオ・・・すげえ・・・・・・・・」

「おい、俊介。見とれとる場合じゃないぞ。時間は少ないんだ。さつさと準備をするぞ。」

「分かってるよ。」

そして僕たちは人が全くいない、森らしき所に来た。

おじさんが、深く・・・息をした。

「よし、俊介。今から『扉』を開くから、心の準備をしておけ。」
よし、ついにか・・・

「ん？待て・・・・・・・・この殺気は・・・！」

おじさんが急に僕を押した。

「痛っっ！なんすんだよ、おじさ・・・・・・・・」

その刹那、『なにか』がさっきまで、僕の頭があった部分を通り

抜けた。

まさか今のは、僕を狙って・・・！

「フッ、こんなに早くお出迎えに来るとはな・・・！」

おじさんが不敵にほほえむ。だが、その顔には優しさという類の物が全て消えていた。

そして、ぼくは『なにか』の正体が分かった。

それは――――樋口先生だ！！！！（第3、4話参照）

第22話..皆既日食（後書き）

ちよつと、遅れましたがまだいいよね！？ 「皆既日食」！！今回はかなり空気読みましたよ、ハイ。

ちなみに、僕は「漢字」も読めます。麻生首相、たいへんですね

）

第23話：墮天使

樋口先生が、甘い声でさそう。

「俊介くん。ひさしぶり！さびしくない？早くこっちに来て！」

僕が踏みだそうとした時、おじさんが手を出し、止めた。

「おじさん・・・？」

「さっさと、化けの皮をはがさんか。この、『墮天使』が。」

「————！！なっ！！？」

なにを言っているのだ、このクソじじいは。

今に樋口先生が怒り出すぞ。

「・・・・・・・・」

なんで、否定しない？

「ヤハリ、サスガネ。ヒガミミツル！！」

そう言った途端、先生の身体が変わっていった。

「コンバート《変形》か！！」

おじさんが言った瞬間にはもう、一体の立派な墮天使が、目の前に立っていた。

身長は優に、2mはあるだろう。

「っな！な、なななな！」

「おい、俊介。お前、『な』としか言っとらんぞ。」

「う、うるさい！そもそも、こんな現実離れした光景見て、無口なおじさんの方が怖ええよ！」

「ふん。もっともな、意見だ・・・なっ！！！」

その瞬間、おじさんの手から出た、無数の火の玉が樋口先生へ向かっていった。

シュウウウウウウウ・・・

「さすがは今世紀最大の魔導士と言われる事はあるな・・・まさか、ルーン（魔唱）無しで魔術が使えるとは！」

とか、言いながらいつの間にか、さっきの、火の玉消えてるし！

「お褒め預かり、光栄ですな。墮天使様っ」

皮肉たっぷりで言ったセリフの次には、もうなにか唱えてた。

「貴様ほどの者がルーンを唱えるだっ!? まさか……」

「そう！そのまさかだっ！！くらえ、地獄の業火——」『ヘル・フレイム』《地獄火炎》つつっ！！！！！！」

巨大な轟炎が樋口先生を包み込んだ。

「ギヤアアアアアアア——」

そして、あっけなく樋口先生は死んだ。

——と、思った。

「なにっ!？」

おじさんがバリアらしき物を張ろうとしてたが、全て遅かった。

おじさんが動いてない。いや、正確には動けていない。

「いや、まさか光と闇を司る陽神の人間が、フレア系最大呪文を使うとは．．．ひじょーに残念だ．．．オレだったら、スペクトル系呪文で、相手を拘束してから、戦うがね。」

その声の正体が近づいてくる。

そいつは――――親父だった。

第24話：本当の恐怖

「ふん。栄介、貴様はついに魔帝皇の使いっぱしりまでに、下がったか・・・まあ、その、精神力では仕方のない事だったがな。」

おじさんが、つらそうに話した。多分、さっきの『すべくとる』なんとかの能力だろう。「オレをその名で呼ぶな！！オレの名は『マール』となったのだ！魔帝皇様が、じきじきにつけてくださったのだ！・・・死ぬ、陽神充・・・本当の恐怖を味会わせてやる！！」
『デストラクション・ヘル・エンペラー』《魔帝皇破壊》
『！！！！！！』

親父から、黒いオーラのような物が出てきたと思うと、瞬く間におじさんを包み込んだ。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア———」

それが、おじさんの最後の声だった・・・

黒いオーラがおじさんから、離れると、そこには干からび、白目をむき出しにして、倒れてるおじさんがいた。

「うわああああああああ———」

「フン。再生、治癒魔術は、無効だ。これは、死の魔術。一回浴びた者は、二度と目をささない。『魂』を吸い取ったんだからな・・・と、いつても、今のお前にそんな高度な魔術は使えんか。」

こんな、自分を無能だと感じた事は無い。目の前で人一人、助ける事もできないのだから。

「いや、さすがです！マール様っ！まさか、カオス系最上級呪文を使うとは・・・！次は俊介を———」

樋口先生（元）の言ってることはだんだん聞こえなくなってきた。変わりに聞こえてきた声は・・・『影』だった。

『こんなに言われて、恥ずかしくねーのかよ？オレ！！』

第24話：本当の恐怖（後書き）

前、書いたブログで、また、新しい、小説を連載しました。今度は新作です！！

タイトルは「紅蓮の邪眼龍」！！！！よろしくお願いします。

「グウウウウウワアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ア—————！！！！」

海最強と、空最強が、ぶつかり始めた。

二体を眺めながら、マーラが呟いた。

「さて、我々も始めるとするか・・・」

「ああ・・・」

こうして、強者達の戦いが始まった——

第26話：強者の戦い（後書き）

そーいえば、この作品に出てくる魔族って、実際にある（いる）のですよ。旧約聖書とか、キリスト教とかの。
マジで！

第27話：王毒

決戦が始まった。

バチッ、バチバチッバチッ
スパーク音が響き渡る。

「ふん、なにか作戦があると、期待したが、しょせん人間の考える事。一度、敗れた相手にまた、同じ手を繰り返すとは……」

「無駄口たたいてる暇、あんのかっ!？」

首筋に剣がかすり、血がにじむ。

「人間風情が、上級魔族に傷を負わせるとは!だが、この程度の傷、すぐ回復して——ごはっ!?!？」

マールが吐血した。

「なっ、なぜあの程度の、傷で——がはっ!」

「これが、ナイトメア・ブリンガーのもう一つの能力「王毒」^{ちから}。名称に「首」とついてる所から、血管へ進入する最強の毒。この毒には、いままでこの能力で死んでいった者の怨念、憎悪などの負の力が入っている。よって、この能力で殺せば、殺す程、毒が強くなる、成長型の毒だ。まあ、ある一定のラインを超えれば、今までためていた、毒が全て、自分にくるんだがな。」

「これが、かつてコーキュートスの王都一つを墓に変えた能力^{ちから}か……。くっくく……。おもしろい、最高におもしろい……。!またの機械にまた、現れる事にしよう。」

「お、おい。待て、逃げる気か!？」

影が、走って近寄りながら、言う。

「さらばだ、俊介。また会おう……。『チェンジ・ザ・ヘル』
《魔界転移》」

「ま、まて!まだ決着が……。!」

もう、そこには、マールの墮天使の姿は無かった。

「ちっ、もう帰んのかよ。ヒマだ。さっさと、あいつと変わろう・・

・おい、もう出てきて良いぞ。」

『おう、やっとか。で、どうなった？』

「自分で確かめやがれ」

『分かったよ・・・』

いままで鋭かった目つきは柔らかくなり、オーラが消え、剣の光も青白い物になっている。

だが、俊介の最初に見た物はあまりに過酷すぎた。

「おじさん・・・おじさんっ!!」

すぐに駆け寄って、胸をさわった。

「大丈夫だ・・・心拍も脈もちゃんとある・・・影が治してくれたのか。おい、生きてますか？おじさくん」

『「生きてますか」ってのはなかなか、核心についているな・・・』

』

「はあ？心拍も脈もあるのに、なんで死ぬんだよ。」

『魂が抜かれるって聞いたことないのか？』

「そりゃあ、聞く・・・まさか・・・」

『そう、そのまさかだ。』

第27話：王毒（後書き）

最近、ブログで連載中の「紅蓮の邪眼龍」が人気なため、そっちに力を注いでいます。現在3話まで、更新しております。もし良かったら、どうぞ。なかなかの力作です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6114g/>

シャドー ～もう一人の自分～

2010年10月13日18時22分発行